

学会紀行文 ～ESC 2026 ミュンヘンで得たもの～

このたび、ドイツ・ミュンヘンで開催された European Society of Cardiology (ESC) Congress 2026 に参加させていただき、私自身の研究テーマについてポスターセッションで発表する機会をいただきました。

今回の演題が採択に至るまでには、松浦先生、田中先生をはじめ、多くの先生方からご指導をいただきました。採択決定後は、ポスターの作成と並行して、発表や質疑応答に備えた英語学習にも取り組みました。直前には自分の発表音声を繰り返し確認しながら、発音や表現の改善を重ねました。また、想定される質問と回答を 20 題ほど準備し、英語で即座に受け答えできるよう練習を重ねました。そうした準備を続けるうちに、瞬間に出発の日を迎えました。

羽田空港からミュンヘン国際空港までは約 17 時間の長旅となり、到着時にはさすがに疲労を感じましたが、ミュンヘンの美しい街並みを目にすると、自然と気持ちが高揚しました。到着日は ESC 開幕前日であったため、ホテルに荷物を預けた後、旧市街を散策しました。マリエン広場の新市庁舎をはじめ、フラウエン教会、聖ペーター教会、レジデンツなど、歴史的建造物や文化施設が徒歩圏内に集まり、街の至るところで長い歴史を感じることができました。また、ビアホールで味わったドイツビールとソーセージも、現地ならではの楽しみの一つとなりました。

滞在 2 日目から ESC が開幕し、初日の朝から学会会場へ向かいました。最初に参加したのはメイン会場で行われたガイドライン関連のセッションでしたが、まずその会場の規模と熱気に圧倒されました。心不全の分類や薬物療法をはじめ、今後の循環器診療に影響を与える新たな考え方が提示される場に実際に立ち会えたことは、非常に貴重な経験でした。その後も Hot Line セッションを中心に参加し、最新の臨床試験の結果が発表され、それに対して世界各国の専門家がその場で議論を交わす様子に大きな刺激を受けました。発表内容はもちろん、その後の discussion も非常に論理的かつ洗練されており、世界のトップレベルの臨床研究に触れることで、自分の視野が大きく広がる感覚がありました。

そして学会 4 日目、自身の発表を迎えました。発表時刻が近づくにつれて緊張も高まりましたが、これまで準備してきた内容を無事に発表することができました。一方、質疑応答では、英語そのものだけでなく、質問者が何を意図しているのかを瞬時に捉えることの難しさを実感しました。十分に準備して臨んだつもりではありましたが、実際の国際学会で求められるコミュニケーション能力との間には、まだ大きな隔たりがあることも

痛感しました。この経験を単なる反省に終わらせず、研究内容をさらに発展させることはもちろん、英語で自分の研究を正確に伝え、議論できる力を身につけるために、今後も継続して研鑽していきたいと思います。

学会以外では、ノイシュヴァンシュタイン城を訪れるツアーに参加したほか、世界屈指の名門サッカークラブであるバイエルン・ミュンヘンの試合を現地観戦する機会にも恵まれました。学術的な経験に加え、ドイツの歴史や文化、スポーツを実際に肌で感じる事ができたことも、今回の滞在をより一層印象深いものにしてくれました。

今回の国際学会への参加は、今後、自分が臨床医・研究者としてどのように成長していくべきかを改めて考える貴重な機会となりました。ここで得た経験や知見を日々の診療や研究に還元するとともに、今後さらに研鑽を重ねていきたいと考えています。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えていただき、演題の作成から発表に至るまでご指導、ご支援いただいた先生方、また学会期間中に病棟を支えていただいた先生方をはじめ、関係するすべての皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

黒木直人





